

乱舞することなく、日常性から脱却できないままに、常識的な行動の規準や価値を、そのまま遊びの世界にもち込んでいようだ。子どもの遊びにおいて実現されるべき「存在の多義的可能性を生きる」という特権を、子ども自らも放棄してしまい、また大人自らも、気付かずしてそれを奪ってしまっているように思われる。

このような日常性を打ち破る手段として、行事を考えてみてはどうだろうか。

幼稚園の行事を、「ハレの日」として位置づけるのである。

楽しみに期待して「待ち」「いつもと全くちがった一日を、思いっきり楽しむ」それだけでよいのではないか。

行事を経験することによって、「何がねらえるか」「あるいは、「どんな教育効果があるか」などと、いわゆる「教育的」なことがらを近視眼的に考えることをやめて、保育者にも子どもにも「徹底して楽しい一日」とするのである。

祭りの準備に忙しいのは大人である。子どもたちは、あわただしい母親の動きや、かすかに聞こえてくる祭り囃子の練習を耳にしながら、ただ、胸をときめかせて「待った」そして、訪れた祭りの一日を、「興奮し、熱狂して」すごした。

「胸のときめき」と「みんなで熱狂する時間」を、いかにして作り出すかだけが、保育者の課題とはいえないだろうか。

幼児の教育第七十二巻第十一号

十一月号 定価二二〇円

昭和四十八年 十月二十五日印刷
昭和四十八年十一月 一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一

印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします